

震災8年目を迎える宮城県における ACT子育て講座による保護者支援活動について

小松陽子¹
川村玲香²
柴田理瑛³
西澤奈穂子⁴
足立智昭⁵

東日本大震災から数年経ち、震災後の心理的支援の必要性がなお求められている。その中で、震災経験のない子どもたちへの影響も報告され、震災地域での子育て環境を整える必要性が取りあげられている。特に、子どもたちの直接的な養育責任をもつ保護者の存在が重要であり、震災後の混乱の中で、大きなストレスを感じつつ子育てを行ってきた保護者への支援が重要であると考えられる。そこで、アメリカ心理学会が開発した虐待暴力防止のための子育て支援プログラムであるACTすこやか子育て講座を取りあげる。その特徴と震災地域での開催後アンケートから、ACTすこやか子育て講座の震災地域における保護者支援プログラムとしての有効性と可能性についてまとめる。

Keywords : ACTすこやか子育て講座、震災、保護者支援、感情、トラウマ

1 震災後の保護者支援の必要性

宮城県の復興計画では、平成32年度までの10年間について、最初の3年間を復旧期、その後の4年間を再生期、そして残り3年間を発展期に区分し、復興計画内容を公表している。つまり、震災8年目を迎えると同時に発展期に突入する。8年という年月を考えるとその年月は長く、宮城県においては気仙沼市と南三陸町の災害公営住宅が全て完成したことなど物理的な復興は進んでいることは理解できる。その一方で、心理的な支援はより一層必要である事が示されている。

例えば、図1は平成21年度から平成28年度までの宮城県におけるDV相談件数の推移を表したものである（宮城県庁家庭生活支援班、2017）。行政への相談ケースは、あまり変化はみられないが、警察への相談ケースはもともと増加傾向にあった中、平成23年の東日本大震災後は特に相

談ケースが増加していることを示している。

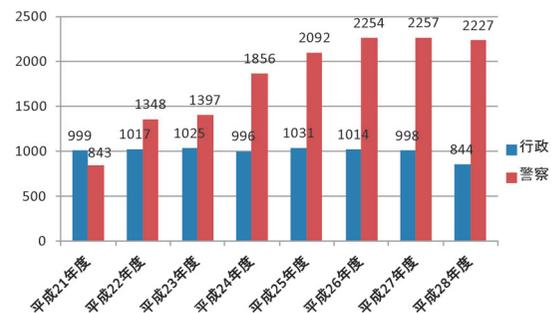


図1 宮城県におけるDV相談件数の推移
※ 女性センターが発表したデータを改変

また、図2は平成21年度から平成28年度までのDV一時保護者数と同伴児数の推移をあらわしたものである。このグラフから、保護者数より同伴児数が上回っていることが示され、DVによる子ども自身への被害や影響が懸念されている（宮城県庁、2017）。

1. 宮城学院女子大学非常勤講師
2. 宮城県教育庁義務教育課
3. 東北福祉大学（本学非常勤講師）
4. アライアント国際大学 カリフォルニア臨床心理大学院
5. 宮城学院女子大学

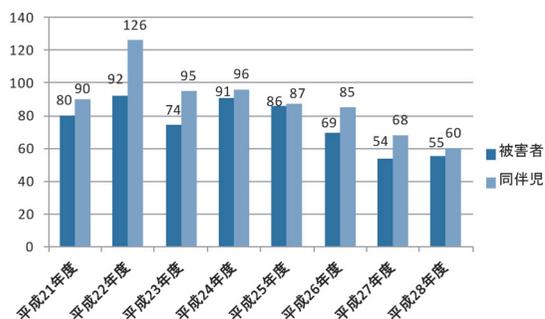


図2 DV一時保護者数と同伴児数の推移
※ 女性センターが発表したデータを改変

加えて、DVのみならず、図3の平成22年から平成28年までの虐待主体別相談件数の推移をみると、全体的に子どもへの虐待数が増えていることがわかる（宮城県庁,2017）。特筆すべきことは、その虐待主体として多いのが実父や実母である。震災後の平成24年以降は増加傾向にあり、震災の影響も否定できない。子どもを巻き込む家庭でのDV相談件数や虐待相談件数の増加は、震災による影響とまったく関係はないとは言いきれず、震災から数年たった現在も、そして今後も我々の生活に影響を及ぼすことは否定できない。

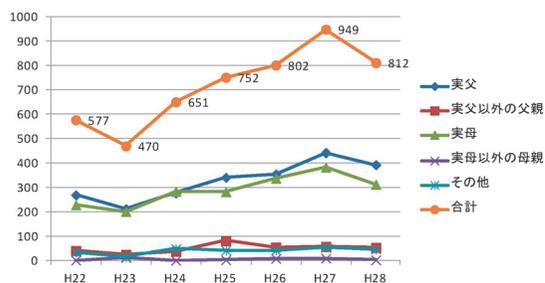


図3 虐待主体別相談件数の推移
※ 宮城県発表のデータを改変

特に、平野ら（2016）が指摘するように保育現場では「震災の記憶のない子どもや、震災発生時には生まれていなかった子どもがADHD児のように衝動性や多動性を示す」ことが報告され、加えて「こうした子どもの心理発達の背景として、彼らの保護者が震災の影響でとても高いストレスの下に置かれていることに影響を受けている可能

性が考えられた」と述べている。この指摘とDVや虐待数の増加から考えると、家庭内での問題の深刻さが予想され、保護者自身の心理的ケアが必要であると考えられる。

また、筆者自身も仙台市の保育技術アドバイザーをしているが、その活動の中で、年少時はなんら問題行動がなかったにもかかわらず年長児になると衝動性を抑えられない子どもを確認した。その際、震災の影響がある可能性を踏まえ保育士が保護者を支援したことで、保護者が自身のつらさや苦しみ、そしてそのことにより子どもに与えていた影響に気づき、親子関係が見直され、子ども自身の問題行動における改善の兆しがみえたケースを経験した。このことから、震災後の子どもへの影響の対応のひとつとして、心理面での保護者支援の重要性が挙げられる。そこで、心理面での保護者支援のひとつとして、ACTすこやか子育て講座について取りあげる。

2 保護者支援におけるACTすこやか子育て講座の有効性

ACTすこやか子育て講座（以下、ACT講座）とは、アメリカ心理学会（以下、APA）が10年以上にわたってデータ集積と改変を積み重ねて作成した虐待防止・育児支援プログラムAdults and children together against violence: Raising safe kidsを、アライアント大学カリフォルニア臨床心理大学院の西澤奈穂子・直井知恵が日本語に翻訳し、ACT日本語版作成プロジェクトチームとともにパイロットを行い、その結果をもとにAPAの協力を得て、より日本の文化・社会に適した形で改変して作成したものである（ACT事務局,2015）。このACT講座は、基本として1セッション2時間、計8セッションで成り立っている。セッション内容は表1に示す。

表1 ACT講座の各セッション内容

開始前準備ミーティング	
セッション1	子どもの行動を理解する
セッション2	怒りの感情を持った子どもを理解し援助する
セッション3	親の怒りの理解とそのコントロール
セッション4	子どもと暴力
セッション5	子どもと電子メディア
セッション6	しつけと養育スタイル
セッション7	ポジティブな行動を導くしつけ
セッション8	ACTすこやか子育て講座を活用するために

このACT講座は虐待防止・育児支援プログラムであるため、講座受講により虐待相談件数が増加傾向にある宮城県において予防的効果が見込まれる。また、そのみならず、震災により疲弊している子育て家庭の適切な親子関係形成の一助となることが期待できる。このACT講座の特徴として、一つ目は、「感情に焦点をあてた体験型のプログラムである」ということである。特に、感情の「怒り」に焦点をあてている。日本では、感情を表出するという事に慣れておらず、特に「怒り」に関しては表出しないことが評価される傾向にある。しかし、ACTの講座では、「怒り」を感じることは自然のことであり、「怒り」を認識しコントロールする方法を提示している。そして、セッションごとのテーマに基づき、ロールプレイやワークに取り組み、子どもや他者の立場を演じることでその感情を理解したり、感情を視覚的にとらえたりといった体験をする。この体験をする、ということで、頭で考えるだけでなく、実感として違った視点から物事をとらえるきっかけとなる場合がある。つまり、受講者は他者の感情や自分自身の感情にも気づき向き合うことができる。気づきを踏まえ、その怒りのコントロール方法についても理解し、ロールプレイを通じて実際に対処できるか、対処しづらい点はどこなのかを確認することができる。

二つ目は、「安心安全な場を提供する」ということである。ACT講座では、講師などといったものは存在せず、ファシリテーターがACT講座を円滑に進めるよう少なくとも2名は置かれてい

る。必要であれば、他にスタッフを置く場合もある。また、ファシリテーターは、事前にACT講座ファシリテーター養成講座を受講した者が務める。このファシリテーターの存在が重要になる。なぜ重要になるかということ、安心安全な場を提供する、ということに貢献しているからである。ファシリテーターは、受講者が安心安全な場を意識できることに最も気を配っている。物理的には、お菓子や飲み物を用意し、リラックスできる雰囲気作りを努めている。心理的な配慮としては、ファシリテーターは受容姿勢で臨み、受講者が話せる雰囲気作りを心掛けている。また受講ルールとして、お互いに知り得たことを決して外部に漏らさない、他者の話に耳を傾け、批判などしないといった受講ルールも提示し、そういったことが守られるよう配慮している。他にも、ACT講座は基本8回開催され、全出席を求められる。そのため、体調不良等も考慮しても、複数回受講者は顔を合わせる事になる。初対面であっても、同じ子育て中の親ということで共通の悩みをもっていることもあり、回が進むことで受講者同士、ファシリテーターを含め、特別なつながりを感じることができ、安心安全な場の形成につながっている。そうした、安心安全な場があるということで受講者は自身の感情に向き合うことができる。

三つ目は、気づいたことを「話し合っただけでシェアできる」ということである。ロールプレイやワークの後は必ず受講者同士で意見や感じたことをシェアする。その際、前述したように意見や感想を批判されたりしない。そのため、受講者は安心安全な場で、自身の意見や感じたことを話すことができる。ロールプレイなどにより客観的に自身や他者の感情に気づき、それを外に表現し、かつ受け入れられることにより、自己受容にもつながる。

これらのことから、ACT講座は、受講者が安心安全な場のなかで、自分自身の考えや感情に向き合い、それを表出し、受容されることを体験できる。被災者の中には、数年たっても自身の感情を表現できない方も多くいる。自身よりもっと大

変な状況の方がいるということや想いを表現することが憚られる、あるいは、想いを語りたくない意識したくない、という方もいる。自身の感情にも目を向けることができない状況の方もいる。ACT講座では、そういった方々にも、段階を踏んで、感情に働きかける機会になるのではないかと考える。このことが、震災でつらく苦しい体験をした保護者の支援に通じる理由である。

3 ACT講座の実際

1) 実施状況

現在、宮城県において震災後の保護者支援としてACT講座を数回実施している。その開催状況について表2に示す。このACT講座開催の広報に関しては、震災後の保護者支援ということは明示していない。震災という言葉に反応し逆に受講から遠ざかると考えたこと、宮城県の子育て家庭全般を支援したいと思ったことから、子育て支援講座として広報活動を行った。実際に受講される方は、子育てに悩みつつも、熱心で、子どもの気持ちに寄り添った子育てを目指している方が多かった。また、開催回数は基本8回であるが、実施の際は回数を減らしている。なぜなら、宮城県でACT講座を開催し始めた当初は、認知度も低く、回数が多いことで参加を躊躇する方が多くいるとの懸念からである。また、受講対象者は0～8歳までの乳幼児を子育て中の保護者としており、子どもの体調不良等で休むことも考えられ、できるだけ全出席できる形で実施したいと考え内容を工夫し実施した。後述する実施後アンケートでは、開始前と異なり回数増加の要望もあり、今後は全7回あるいは全8回を予定している。

表2 ACT講座実施状況

開催年	開催場所	回数	参加人数
H26	仙台市内幼稚園	全4回	24名
H27	子どもの村東北	全6回	8名
H28	子どもの村東北	全6回	8名
H29	仙台レインボーハウス	全7回	13名

宮城県では、保育園（所）や児童館などの学童保育において、感情をコントロールできない落ち着きがない気になる子が震災後より増えており、どのように対応すべきか苦慮しているという声があがっている。加えて、そういった子どもの保護者支援にも悩んでいるとの話しをよく耳にする。こうした状況から、ACT講座の紹介の意味を含め、保育支援者向けに講座内容の重要な点を簡潔にまとめたACTをつかったミニ子育て講座も実施している。これまでの保育支援者向けの講座実施状況については、表3に示す。

表3 支援者向けACTミニ講座実施状況

開催年	開催場所	回数	参加人数
H27	多賀城市内保育所	全3回	11名
H28	仙台市内保育所	全2回	16名
H28	亶理町児童館	全2回	10名
H28	岩沼市	全3回	16名
H29	亶理郡山元町	全3回	21名

2) 実施後アンケートより

①講座に参加したことに関する設問

ACT講座では、講座終了後にアンケートを実施している。ここでは、アンケート結果を保護者支援におけるACT講座の有効性の視点からまとめ、報告する。今回は、筆者がファシリテーターとして関わった平成28年の子どもの村東北におけるACT講座受講者と平成29年の仙台レインボーハウスにおけるACT講座受講者のアンケート結果を記す。欠席などにより有効回答数は19（19名分）である。

まず、アンケートにおいて、この講座に参加したことに関する次の11問について「全くあてはまらない」「あてはまらない」「どちらともいえない」「あてはまる」「とてもあてはまる」の5件法で尋ねた。結果は表4のとおりである。

この結果から、「Q1よりよい子育てをするための新しい知識や方法が得られた」や「Q2子どもの行動や感情についての理解が深まった」、「Q3自分の反応や感情についての理解が深まった」と

表4 ACT講座に参加したことに関する質問

質問項目	全く あてはまらない	あてはまらない	どちらとも いえない	あてはまる	とても あてはまる
Q1 よりよい子育てをするための新しい知識や方法が得られた。	0 0%	0 0%	0 0%	10 53%	9 47%
Q2 子どもの行動や感情についての理解が深まった。	0 0%	0 0%	0 0%	6 32%	13 68%
Q3 自分の反応や感情についての理解が深まった。	0 0%	0 0%	0 0%	7 37%	12 63%
Q4 子どもへの苛立ちや怒りの感情がわいた時、より適切に行動できるようになった。	0 0%	0 0%	4 21%	11 58%	4 21%
Q5 自分自身への、ねぎらいやいたわりの気持ち、持てるようになった。	0 0%	0 0%	5 26%	8 42%	6 32%
Q6 子育てに関する不安やストレスが軽くなった。	0 0%	0 0%	1 5%	17 89%	1 5%
Q7 子どもの困ってしまう行動が減った。	0 0%	1 0%	13 68%	5 26%	0 0%
Q8 よりよい子育てできるようになった。	0 0%	0 0%	5 26%	12 63%	2 11%
Q9 この講座に満足している。	0 0%	0 0%	0 0%	6 32%	13 68%
Q10 この講座は楽しみながら参加できた。	0 0%	0 0%	0 0%	3 16%	16 84%
Q11 講座での安全が守られており、安心して参加できた。	0 0%	0 0%	0 0%	2 11%	17 89%

上段：人数（名）

下段：割合（％）

いった、知識習得や理解に関しては「あてはまる」や「とてもあてはまる」と回答する方がほとんどであった。特に、ACT講座の重要な特徴である「感情」の理解については、「とてもあてはまる」と回答した方が6割以上いた。一方、「Q4子どもへの苛立ちや怒りの感情がわいた時、より適切に行動できるようになった」や「Q5自分自身への、ねぎらいやいたわりの気持ちが、持てるようになった」といった、習得した知識を実際に使う行動面の設問に関しては、約半数近くが「あてはまる」「よくあてはまる」と答えてはいるが、約2割の方が「どちらでもない」と答えている。これは、知識習得や理解は容易であるが、それを行動に移すことの難しさがわかる。それに伴い、親の行動が変われば子どもの行動も変わることが期待されつつも「Q7子どもの困ってしまう行動が減っ

た」と7割近くの人が「あてはまらない」「どちらともいえない」と答えていた。このことから、知識習得や感情の理解は講座受講により促されるが、それを基にした行動の変容までは、十分ではなく、当然のことであるが、相手の行動に影響を与えるまではすぐに結果が出ず、時間の経過の必要性が示された。しかし、ACT講座自体に関してはQ9やQ10のように、楽しみながら講座に参加し、満足できていることが示された。特に、Q11の安全が守られており安心して参加できたかどうかに関しては、約9割の受講者が「とてもあてはまる」と回答している。このことは、ACT講座の有効性として挙げたことが、アンケートにおいて受講者自身にも評価されていることが明らかとなった。

②ACT講座の内容について

ACT講座で「心に残ったもの」を、選択肢を挙げ複数回答可で尋ねた。選択肢ごとの結果に関しては図4に示す。選択肢として図4に記載した12項目あるが、ワークに関してはさらに7つのワークを挙げてそれぞれ回答を求めた。ここでは全ワークとして一つにまとめる。その際、各ワークに関して一つでも心に残ったものと挙げている場合はカウントしたため、解釈に注意が必要である。

全体的に、「ワーク」「話し合い」「ファシリテーターの姿勢や説明」「お茶やお菓子」「アートや工作」「ロールプレイ」の主に6つが、受講者には、「心に残るもの」として評価されている。前述したように保護者支援におけるACT講座の有効性として、「感情に焦点をあてた体験型のプログラムである」「安心安全な場の提供」「話し合ってシェアできる」の3つを挙げたが、それらの視点から結果をみていきたい。

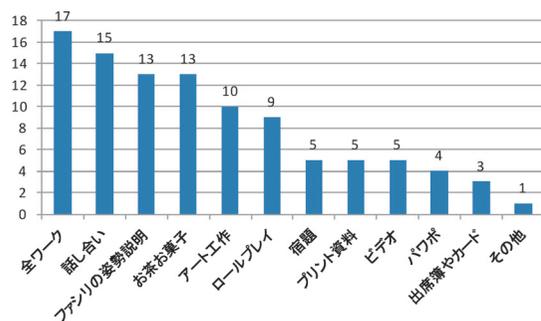


図4 「心に残ったもの」という問いに対する各項目の選択者数を表したもの

まず、「感情に焦点をあてた体験型のプログラムである」に関して、その感情に焦点をあてて自身の感情に対する向き合い方やコントロール方法について伝える「ワーク」が最も多く挙げられている。7つのワークを挙げ、それぞれに尋ねているものをひとつにまとめたため、選択される可能性は多くなるが、そのことを考慮しても19名中17名の受講者に評価されている。また、他者の気持ちも体験することができる「ロールプレイ」

に関しても19名中9名が心に残るものとして挙げている。ロールプレイに関しては、講座実施の中で苦手意識をもつ受講者もいらっしやる。一方で、アンケートでは自由回答による感想も求めており、そこで「ロールプレイで子ども役になると自分で想像するよりも子どもの気持ちが分かった」や「初めてロールプレイをしてみてももしろいし、各々の人の気持ちを改めて考えてみることで、気づかされる事がたくさんあった」等の感想もあった。このことから、子どもを含む他者の感情理解においてロールプレイは有効であると受講者にも認識されていることが確認できた。

「安心安全な場の提供」に関係するものとして、約半数以上の受講者からは「ファシリテーターの姿勢や説明」「お茶やお菓子」「アートや工作」が心に残るものとして選択されている。ファシリテーターに関しては、自由記述で「やさしさや心配りに温かい気持ちになりました。安心して参加することができました」とある。このことから、ファシリテーターの存在が「安心安全な場の提供」に関わっていることが明らかとなった。「お茶やお菓子」に関しては、一般的に講座ではお菓子等は提供されることは少ないため、心に残ったものとして挙げられた可能性はある。しかし、講座中の様子から、用意しているお茶やお菓子を受講者同士で取り分けたり、お菓子の味に関して受講者同士の話しのきっかけになったり、嗜好について話題が広がったり、受講者同士の雰囲気づくりを担っている印象がある。そのため、安心安全の場の提供の一役を担っていると考えられる。「アートや工作」に関しては、ACT講座の一つの特徴として「夢の箱」というものを作成する。まず、講座最初に無地の箱を配付し、講座中はその箱をシールやマスキングテープ、折り紙等を使って自分好みにデコレーションすることができる。また、セッションごとに気づいたこと、自身の子どもに対する気持ちなどをカードに記載するのだが、そのカードを夢の箱にしまう。講座終了後も、その箱を開け、中のカードを見返すことができるものである。振り返りにも用いることもできるが、講

座中に装飾することで、机に向かって何かを学ぶというより、ゆったりした気持ちで講座に向き合うことができるものとなっている。落ち着かないとき、そういった作品をみることで気を紛らわすことができたり、心が和んだりすることもある。そういったことで、心に残るものとして評価されているのではないかと考える。

「話し合ってシェアできる」に関係するものとしては、やはり「話し合い」が挙げられる。「話し合い」に関しては、19名中15名に心に残ったものとして評価された。ひとつひとつのワークやロールプレイ後には、受講者の感じたことや疑問に思ったこと等をグループで話し合い、内容を全体でシェアするようにしている。そのことで、様々な視点から一つの事象をみつめ、気づきが増えることを促している。ACT講座では子育ての知識を伝えるだけでなく、受講者自身による気づきを大切にしている。お互いに気づいたことを伝え合い、シェアすることで、気づきが促されたり広がりたりすることも期待している。中には、人に意見を話したりあるいは聞いたりすることに苦手意識をもつ方もいるかもしれない。そんな中、話し合いが心に残るものとして多くの方が挙げているのは、好意的に受け取られていると考えられる。特に、自由回答でも「皆同じように悩み育児ストレスを抱えているんだと思って少し心が軽くなりました」「真面目に子どもの悩みに取り組むお母さんがたくさんいる事が心強かった」と、ある。ワークなどの後の話し合いで内容を深く話し合うだけでなく、他者の考え方や悩みを知ることで、共通点を見出し、みんな同じであると安心感をもちつつ共感すると同時に、励まされる方がいることが明らかとなった。

4. まとめ

ACT講座は、宮城県のみならず、主に東京、横浜、和歌山、福島でも開講されている。では、なぜ震災支援としてACT講座を取り上げるのか。最も大きな問題意識としては、震災が起因と考えられる虐待やDVの相談件数の増加が背景にある。

もともと、宮城県は虐待やDVの相談件数は少なくなかった。しかし、平成23年を境により増加傾向を示した。このことは、もともと宮城県にあった家庭内の問題要因が、より顕著に複雑に絡み合って表れたためと考えられ、震災による生活変化からのストレスが依然高い状態にあると考えられる(柴田ら、2016)。震災を意識した特別なプログラムというよりも、すでに問題化していた家庭内の問題に焦点をあてるべきと考えるからである。また、震災から8年が経過している。加えて、家庭の問題は外からは見えにくい。外から問題が見えにくいまま時間が経過することにより、震災による影響は我々の日常に埋まりつつある。震災による問題が、長い月日と共にそれが当たり前となり、日常的な問題として表れている。よって、震災に特化するのではなく、日常に働きかける子育て支援が最も効果的であり適切ではないかと考える。そのためか、他県のアンケート結果を比較すると、ACT講座に対する感想や評価点に差異はない。

強いて、異なる点を挙げるとすれば、実施する際の講座を進める過程で配慮すべきことがあるという点である。例えば、子どもが受ける暴力の傷を視覚的に理解するワークがある。その際、紙人形を用いてワークをするが、東北地方では、傷ついた方が多いので、人形の形にせず丸型に切った紙を用いたりする(高橋、2017)。また、ACT講座の参加申し込みの際に、事前に配慮して欲しい点を教えていただくようにしている。ファシリテーターとして開催に先立ち、受講者の様子を見て判断しつつ配慮していることが現状である。

また、効果として、時間の確保も挙げられるのではないかと考える。柴田ら(2016)によると、宮城学院女子大学発達臨床学科の学生がセントポール幼稚園(福島県郡山市)へ保育ボランティアとして、環境整備や保育補助を1日行った。そのことで園長から、その数時間の手伝いのおかげで、保育者が子どもと向き合う時間ができ、かつ子ども自身にも喜びの表情が見られたとの言葉もあったようである。これは、震災による影響をう

けた保育現場における事例であるが、震災の被害を受けた子育て家庭においても同じ効果が期待される。震災により、被災地域から移動してきた方も宮城県には多くいる。その際、就職の関係から、保護者である両親が新たな仕事につき経済的にも精神的にも余裕がないことがある。あるいは、単身家庭となることもあり、より子どもと接する時間や自身のための時間をとる余裕がない場合もある。このことから、「時間」の提供というものもACT講座の有効性として挙げられると考えられる。アンケートにおいても、「この講座を他者に勧めるか」という質問に対して「はい」と答えた方々が、その理由として、「何よりママの時間となるし、自分を大事に思える時間」「子育て中、『自分のため』の時間がなかなか持てないことが多いので、とても貴重なステキな時間」と記述してあった。子育てをしていると、自分のために時間を使うことが躊躇されたり、なかなか自分の時間をもったりすることがかなわない。震災の被害がある家庭では、場と時間の制約を受ける。そんな中、子育てのための学びの時間として、楽しみながら自身と向き合う時間をもてることが、安心感へと繋がっていくのではないだろうか。一般的な子育て支援にもつながるが、震災支援として「安心安全な場と時間の提供」として挙げたい。

宮城県で行うACT講座は、震災地域における保護者支援を掲げているが、あくまで子育て支援でありつつ、震災に特化したものではない。しかし、震災による問題が日常に潜みこれまでの子育て関連の問題がより顕在化した宮城では、その効果が期待できると考える。広報を行う上で、震災を前面に出した講座の紹介はまだ配慮を要する。しかし、保育支援者向けの講座でも支援者自身は保護者支援の必要性を感じている。宮城県内で講座を実施していくことで、震災に関わる保護者支援に役立てることを期待する。

謝辞

福島県・宮城県におけるACTすこやか子育て講座の開催ほか、主催である日米親子支援ネット

の活動は、JCCNC (Japanese Cultural and Community Center of Northern California) による震災支援を目的とした多額の助成金によって成り立っています。心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) ACT事務局 (2015) ACTすこやか子育て講座ファンリテーター養成講座資料
- 2) 宮城県庁保健福祉部子育て支援課家庭生活支援班 (2017) 配偶者からの暴力の防止及び被害者の支援等に関する基本計画 (第5次)・中間案、<http://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/654137.pdf> (参照2018年1月)
- 3) 宮城県庁保健福祉部子育て支援課 (2017) 児童相談所での児童虐待相談対応件数について (速報値) 統計資料(8月29日)、<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/kosodate/number.html> (参照2018年1月)
- 4) 柴田理瑛・平野幹雄・西浦和樹・足立智昭 (2016) ライオンズクラブ心の復興プロジェクト震災復興心理・教育臨床センター活動報告 宮城学院女子大学発達科学研究16. 33-40
- 5) 柴田理瑛・平野幹雄・西浦和樹・足立智昭 (2017) 2016年度ライオンズクラブ心の復興プロジェクト震災復興心理・教育臨床センター活動報告 宮城学院女子大学発達科学研究17. 59-62
- 6) 高橋紀子 (2017) 震災から6年、今子育て中の親に必要なものとは～ACTすこやか子育て講座 福島による取り組み～ 日本子ども虐待防止学会 第23回学術集会ちば大会 口頭発表 質疑応答